

いのの風に吹かれて⑮

コロナ禍の学生たち

山崎きよ

新型コロナウイルス感染症の影響で、生活が苦しくなっている学生を支援しようと全国で食糧支援の活動が広がっています。アルバイトで生活費を賄っていた学生が、バイト先の休業で収入が途絶えたり、親の収入が減少して仕送りが減るなどで経済的に追い込まれていることから始まりました。

いの町には大学はありませんが、隣の土佐市に高知リハビリテーション専門職大学があるので、土佐市の市議さんや民青同盟の人たちと協力して「ほっとまんぶくプロジェクト」を立ち上げました。10月に第一回の食糧支援を計画し、チラシを土佐市議さんが大学に持って行き、協力をお願いしました。なんと日本共産党と民青同盟の共催のチラシを学内で配布してくださったよう、当日はそのチラシを

持って学生が30人近く来てくれました。お米やレトルト食品、野菜や日用品、筆記用具などを並べると、時間をかけて真剣に選んでいました。

アンケートを取りながら対話をしていくと、学生の状況が垣間見えてきました。学費120万円は親が出してくれるけど仕送りはゼロでアルバイトで生活費を賄っている学生。バイトはしていないが奨学金を無利子・有利両方借りているという学生。仕送りのある学生でも3万円、5万円が多く、とても余裕のある状況ではありません。コロナの影響も深刻ですが、それ以前に既に厳しい経済状況であることも分かりました。

対話しながら「大変だねー」と思わず声が出ましたが、本人たちはそれが当たり前なのか、それほど大変そうな返事がありません。皆がそうだからでしょう。理学療法士や作業療法士という福祉分野の仕事についてある若者の環境がこれくらいのかと悲しくなります。

異常に高い学費をアルバイトと奨学金で賄わせるといふ自己責任を押し付けてきた国の責任が問われます。食糧支援が自己

責任を押し付けられてきた学生への励ましと連帯の場所になればと思います。



生徒とのふれあい②

谷内純一



山のなかの高校のことです。マラソン大会で私は峠の折り返し点に立っていました。先頭を走ってきた女生徒は二年続けて一位をとった生徒でした。三年生になってやや太ったからでしょうが、峠近くで急にスピードが落ちよるめくような走り方になりました。すると二位の生徒が迫ってきました。「あ、倒

れてしまうー あまりの急な弱り方に私は思わずその子に「玉川頑張り、玉川頑張り」と声を掛けました。すると彼女は不意に姿勢を立て直して走り出し、やがて峠を下ってゆきました。

あの子は無事完走できるだろうかと案じました。学校に帰って寮の食堂で彼女に会いました。「完走できたか」と尋ねると一位だったとのことでした。彼女は「峠の折り返し点に近づいた時、なぜか急に苦しくなっちゃあ、もう駄目と思い始めたんですよ。そのとき先生が声を掛けて下さったので、とたんに元気が出て最後まで走ることができました。」と言いました。やすらかにほほえんでいる彼女の表情が印象的でした。



別の高校で私は生徒部長でした。長い停学中の生徒を家庭訪問したときのことでした。お母さんが「先生この子は学校をやめると言っています。どうぞとめてください。」というので、驚いて「君より成績がずっと悪

い生徒でも卒業しているよ。大丈夫、絶対卒業できるからやめないのがいいよ。」と口を酸っぱくして引き留めましたが、ふだんはおとなしい彼がガンとして気持ちを变えませんでした。

私は家庭訪問するのが遅かったと唇をかみました。いったん気持ちも切れてしまったら、もう駄目なんです。タイミングがだいじです。マラソンの例では上手くゆきましたが、この場合は駄目だったのでした。

がっかりして、家を辞しようとしたとき、お母さんが「先生ありがとう。駄目だったけど、お礼にこれ取ってください。」と言って、無造作に一万円札をさしました。私は驚いて、もちろん受け取りませんでした。が、帰途、落胆の気持ちのなかにも、可笑しく思う気持ちがこみあげてきたことでした。

